



Data

監督・撮影：木村大作
 脚本：小泉堯史
 原作：葉室麟『散り椿』（角川文庫刊）
 出演：岡田准一／西島秀俊／黒木華
 ／池松壮亮／麻生久美子／
 緒形直人／新井浩文／柳楽
 優弥／芳根京子／駿河太郎
 ／渡辺大／石橋蓮司／富司
 純子／奥田瑛二

■■■ショートコメント■■■

◆原作は『蛸ノ記』で直木賞を受賞した葉室麟の名作、『散り椿』。脚本は『雨あがる』の小泉堯史。監督・撮影は『劔岳 点の記』（08年）（『シネマ22』250頁）の木村大作。そして、主演は『永遠の0』（13年）（『シネマ31』132頁）、『蛸ノ記』（14年）（『シネマ33』未掲載）、『エヴェレスト 神々の山嶺（いただき）』（16年）（『シネマ37』86頁）、『海賊とよばれた男』（16年）（『シネマ39』68頁）、『追憶』（15年）（『シネマ39』206頁）、『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）等の岡田准一。そう聞けばこりゃ必見！

時代劇はカネがかかいるから、その企画製作は大変だが、時代劇の名作を絶やさないように作っていかねければ・・・。

◆藤沢周平の原作による時代劇『たそがれ清兵衛』（02年）（『シネマ2』68頁）や『隠し剣 鬼の爪』（04年）（『シネマ6』188頁）、『蟬しくれ』（05年）（『シネマ8』200頁）、『武士の一分』（06年）（『シネマ14』318頁）、『山桜』（08年）（『シネマ19』394頁）、『花のあと』（09年）（『シネマ24』126頁）、『必死剣 鳥刺し』（10年）（『シネマ25』196頁）の舞台はいつも庄内の海坂藩だが、本作の舞台は扇野藩。冒頭の雪のシーンを観れば、それが雪国だということがわかるが、さてタイトルになっている「散り椿」とは？

これはパンフレットによると、正式名称は「五色八重散り椿」で、「花卉が一片一片散っていく。一木に白から紅まで様々に咲き分け艶やかである」とされている。しかし、今ドキこれを理解し、この風情を楽しむことができる日本人はHow many・・・？

◆冒頭、見事な剣の腕前を披露した瓜生新兵衛（岡田准一）は、それに続く導入部では妻、篠（麻生久美子）とのラブシーン（？）で、死んでいく妻への健気な気持ちを伝えた後、なぜか1人追放された扇野藩へ戻っていくことに。彼が身を寄せたのは、篠の妹、坂下里美（黒木華）と、弟、坂下藤吾（池松壮亮）が住む坂下家だが、瓜生が戻ってきたと聞いた扇野藩城代家老の石田玄蕃（奥田瑛二）は急警戒。

しかして、18年前に扇野藩の勘定方の不正を巡って起きた騒動とは？また、その時、「平山道場・四天王」と呼ばれた瓜生新兵衛、榊原采女（西島秀俊）、篠原三右衛門（緒形直人）、坂下源之進（駿河太郎）の立場と役割とは？

それは原作を読み、本作をじっくり観てもらいたいが、天下泰平と言われた徳川時代にも、有名な「伊達騒動」をはじめ、各藩ごとにさまざまなお家騒動があったわけだ。

◆本作のストーリーの骨格の1つは、城代家老として和紙問屋の田中屋惣兵衛（石橋蓮司）を活用することによって扇野藩の「財政再建」に辣腕をふるったものの、惣兵衛と共に私腹を肥やしていた石田玄蕃率いる石田派と、次期藩主（御世子）の政家（渡辺大）に忠義を尽くす御世子派との対立。18年前、四天王たちはことごとく御世子派についていたが、今、石田派に対抗しているのは、側用人に出世している榊原采女だけだ。そんな情勢下に新兵衛が戻ってくると、石田にとってはうっとうしい限り。その上、石田から起請文ももらっているものの、石田の権謀術数を心配する惣兵衛が、あろうことか新兵衛に“用心棒”を頼んだから、コトはややこしいことに……。石田にしてみれば、今や何とでもあの起請文を取り戻さなければ……。

そんな中、江戸にいた政家が扇野藩に戻ってくることが決まると、ついに石田派 v s 御世子派の対立はクライマックスに……。

◆本作のもう1つのストーリーは、篠を巡る新兵衛と采女との三角関係（?）。冒頭に見たとおり、篠は新兵衛の妻として死んでいったが、采女が扇野藩の側用人まで登りつめているのに対し、新兵衛は藩を追放されてしまったから、篠の幸せは薄かったの？また、篠はなぜ死ぬ際に「もう1度散り椿を見たい」という言葉の他、新兵衛に対して「采女を助けて欲しい」という言葉を残したの？

本作では、坂下家に戻ってきた新兵衛が篠の仏壇に手を合わせる風景が何度も登場する他、篠が新兵衛に残した手紙と、篠が采女に残した手紙の双方が、新兵衛と采女の2人の男の生き方にいかなる影響を与えたかが鮮明になっていくので、それに注目！もともと、恋のせめぎ合いの結果として登場する2人の決闘シーンは、木村大作監督の撮影によって美しいシーンになっているが、“ある理由”によってその決闘は中途半端なままで終わり、本来のあるべきクライマックスに向かっていくので、それに注目！

◆織田信長が1575年の「長篠の戦い」で、鉄砲を活用して武田軍の騎馬隊を撃破したのは有名な歴史的事実だが、天下泰平が続いた江戸時代の扇野藩で、鉄砲はどの程度実用化、実戦化されていたの？また弓矢は？

本作では政家が江戸から戻ってきた時、何者かに鉄砲で襲撃され、政家を守っていた平山道場・四天王の一人で、扇野藩の馬廻組頭をしていた篠原三右衛門（緒形直人）が死亡するシーンが登場する。さらに、本作ラストのクライマックスでは新兵衛と采女の2人が腹を決めて石田を討つべく歩み始めたとき、思いがけず2本の弓矢が放たれ、それが2本とも采女の胸に命中するシーンが登場する。いくら武芸に優れていても、見えない場所か

ら鉄砲や弓矢でやられたのでは対抗手段はないが、そんなシーンで主役や準主役が死んでしまっただけでは、殺陣を中心とする時代劇の美学は成立しなくなってしまう。したがって、時代劇の美学には飛び道具は邪道だが、新兵衛に命中しなかったのは幸いだ。その結果、本作ラストでは、遂に新兵衛が石田と切り結ぶことになるが、その結果は？そして、木村大監督の撮影によるその美学は？

◆これにて扇野藩の「お家騒動」は一件落着だが、新兵衛がそのまま扇野藩に残るわけにいかないのは当然。その結果、榊原采女も篠原三右衛門も死亡してしまった今、それまでは少し頼りないと思われていた坂下藤吾に扇野藩運営のウエイトがかかることに。しかし、藤吾は篠原三右衛門の娘である篠原美鈴（芳根京子）と結婚して篠原家の婿養子になるように政家から命じられ、坂下家と篠原家双方の継続のため「子作りに」しっかり励め！」と命じられることに。まあ、扇野藩が平和になれば、きっとそれも可能に・・・。

2018（平成30）年8月7日記